第2講

人文科学系(2)
情動への向き合い方

チャプター1

資料読解

生徒メモ欄

次の文章は「感情労働」(感情の抑制を労働内容の不可欠な要素とするような労働)にどのような問題が含まれるかについて,カズオ・イシグロの小説『日の名残り』の主人公スティーブンスを例に考察したものである。

1　スティーブンスはイギリス政界の名士ダーリントン卿(きょう)に仕える執事である。彼は卿の屋敷ダーリントン・ホールで執事の仕事を完璧なまでに見事に遂行していた。その仕事ぶりは,彼の父が死の床に着いていたときでさえ,集まった来客にいつもの手厚いサービスを怠らない徹底したものであった。彼は立派な執事には「尊厳」というものがなければならず,その尊厳とはどんな私事にも左右されずに己の職分をまっとうすることだと考えた。

2　しかし,このような徹底した仕事への献身により,スティーブンスは同じダーリントン・ホールで働く女中頭のミス・ケントンが彼に寄せる思いに気づかないままに終わってしまう。彼はミス・ケントンが彼に強い恋心を示しているにもかかわらず,しかもそれに応じて彼自身も彼女に強い情動(注一)を抱いているにもかかわらず,その情動が何であるのかを突きとめようとせず,それゆえ彼女の恋心を明瞭に認識しようとはしなかった。それは彼女への愛が執事としての自分の仕事を妨げると暗に考えて,無意識のうちにその愛を自分に許そうとしなかったからである。彼は,ミス・ケントンが彼への思いを受け入れてもらえずに悲痛な涙を流しても,それに戸惑いを覚えるだけで,自分の情動の正体を明らかにしようとしなかった。それどころか,彼はその

戸惑いを断ち切って，自分は執事だという決然たる思いに立ち返り，「大きな勝利感」が心の奥底から湧き上がってくるのを感じるのである。

3　スティーブンスは一見，執事の鑑(かがみ)のようにみえる。彼がミス・ケントンの思いに明示的には気づかなかったことはたしかに悲劇的ではあるが，それはけっして彼がそのために非難を受けねばならないことではないように思える。しかし，ブルーワー(注二)は彼を厳しく非難する。スティーブンスはミス・ケントンの思いを受けて，自分も彼女への強い情動を抱きながら，それでもその正体を明らかにしようとはしなかった。彼が自分の情動の正体を深く問い，それを明らかにしていれば，彼は当然ミス・ケントンの思いにも明示的に気づき，彼女との関係は根本的に違ったものになっていただろう。

4　たしかにスティーブンスが自分の情動を明示的に理解し，ミス・ケントンの思いをはっきり認識するようになったとしても，彼が彼女の思いを受け入れたとは限らないだろう。彼はそれでもなお，ミス・ケントンとの関係よりも，執事として完璧な仕事を遂行することのほうを自分にとって重要なことだと思って，彼女との関係を断ち切ったかもしれない。しかし，たとえそうであったとしても，彼が自分の情動を明示的に理解したうえでそうしたということがここでは重要である。ブルーワーが彼を非難するのは，彼がミス・ケントンとの関係よりも執事の完璧な仕事を選んだからではなく，彼が自分の情動を明らかにしようとしないままそうしたからである。執事の仕事は人間としての対等な尊厳を傷つけるから，ミス・ケントンとの関係より執事の仕事を選ぶことは間違っているかもしれないが，ブルーワーがここで問題にするのはその点ではない。それよりもはるかに深い根源的な問題が存在するのであり，それはスティーブンスが自分の情動を明らかにしようとせず，それゆえ自分の置かれた価値的な状況を明示的に理解しようとしなかったことである。このような自己洗練の欠如こそが問題なのである。そしてブルーワーに言わせれば，執事という感情労働がスティーブンスの自己洗練を妨げたところに，感情労働というものの根本的な害が存在するのである。（中略）感情労働は自分の情動を生存のための手段にしてしまうことで，情動の本来の働きを妨げる。情動はそれの明確化を通じて人間としての本来の価値を見いだし，その価値を成就することを可能にすることがその本来の働きであるが，感

生徒メモ欄

生徒メモ欄

情労働はそれを妨げるのである。

5　感情労働は自分の情動を生きるための手段にしてしまうことで，情動の明確化を通して人間としての真の価値を悟るのを妨害する。これが感情労働の害にかんするブルーワーの見解である。それは基本的には正しいように思われる。しかし，執事のスティーブンスの例を見ると，一つ重要な疑問が浮かんでくる。スティーブンスはきわめて有能な執事であり，執事に求められる諸活動，たとえば主人への深い尊敬や客への厚いもてなしの気持ちをしっかりともっていた。しかし，そのような情動がミス・ケントンにたいする自分の情動を明確化することを妨げた。そこに執事としての感情労働の根源的な害があるとブルーワーは言う。たしかにそこに深刻な害があることは疑いないだろう。しかし，それよりもさらに根本的な問題がそこにはあるように思われる。すなわち，そもそも執事に求められる情動をスティーブンスが明確化できなかったことである。その情動を明確化できていれば，当然，彼はミス・ケントンへの情動も明確化できたであろう。

6　感情労働のもっとも根源的な問題は，そこで求められる情動がその他の情動の明確化を妨げるということではなく，そこで求められる情動そのものが明確化を妨げられるということであるように思われる。感情労働という労働形態は，そこで要求される情動がどのようなものであるかを明確化することを妨げるのだ。感情労働は自分の情動を生きるための手段にしてしまうか，それが有害であるのも，そうすることでその情動をやむをえないものとしてあきらめさせ，それ以上それを明確化しないようにさせるからである。

7　感情労働はさらに，そこで要求される情動の明確化を妨げるだけではなく，そうすることでその情動がじつは不適切だということの自覚化も妨げる。感情労働の従事者は最初のうちは，要求される情動を抱くことに違和感や嫌悪感を抱くであろう。そのような違和感や嫌悪感は要求される情動の正体を明確化する重要な手がかりとなるものである。しかし，感情労働はそのような違和感や嫌悪感を抑圧して，むしろ要求される情動を内面化するように仕向ける。こうして最初は嫌々の強いられた情動であったものが，自発的に湧いてくる自然な情動になる。それは自己欺瞞（まん）的に抱かれた情動であり，それ自身の正体を明確化する手がかりを奪われてしまった情動なのである。

8　スティーブンスは完璧な執事であった。彼は執事として

要求される情動をすべて自然に抱くことができた。しかし，そのことはとりもなおさず，彼がそのような情動を明確化するいっさいの手がかりを失ってしまったということである。彼にとってそのような情動は違和感や嫌悪感を覚えるどころか，誇らしくさえあるものだ。それは彼の執事としての尊厳を根底から支えている。しかし，そうであるからこそ，彼はその情動をそれ以上明確化することができず，その正体に気づくことができないのだ。こうして彼は人間としての真の価値に目覚めることができないまま，生涯を過ごすこととなる。

[9]　じつはスティーブンスにも，執事として彼に要求される情動を明確化する重要な機会が何度か訪れていた。しかし，結局のところ，彼はそれらの機会をうまく活かすことができなかった。彼が敬愛する主人のダーリントン卿が一度，大きな間違いを犯したことがあった。卿は二人のユダヤ人の召使いをユダヤ人だという理由だけで解雇してしまったのである。彼らは本当によく働く申し分のない召使いであった。そうであるにもかかわらず，ダーリントン卿は彼に植えつけられたユダヤ人への偏見のゆえに，彼らをユダヤ人だという理由だけで解雇してしまった。スティーブンスは彼らの解雇に内心では大反対であったが，そうであるにもかかわらず，卿への忠誠心から，解雇の決定に粛々と従った。女中頭のミス・ケントンが怒りを顕(あら)わにして解雇に反対しても，スティーブンスはそれに取り合おうとしなかった。彼はミス・ケントンに，自分たちは主人のダーリントン卿に反対する立場にはないと言って，あくまでも卿への忠誠心を貫き通そうとした。ミス・ケントンが怒りを顕わにして反対したことは，スティーブンスにとって，彼がダーリントン卿に抱いていた忠誠心を明確化して，その正体を悟る絶好の機会であったはずだ。しかし，彼はその機会を逸してしまう。彼の絶対的な忠誠心がその忠誠心を顧みることを絶対的に妨げてしまうのである。

[10]　感情労働のもっとも根本的な害は，それに求められる情動の明確化を妨げる点にある。求められる情動が自然に湧いてくるようになればなるほど，その害にどっぷりと浸かってしまうことになる。そこから脱出するには，抑圧された違和感や嫌悪感を探り出し，それを手がかりにして要求される情動を明確化しなければならない。つまり，要求される情動が真正性の欠如した欺瞞的な情動であることを暴き出さなければならない。そして自分が本来抱くべき情動，自

生徒メモ欄

生徒メモ欄

分の置かれた価値的状況に本当の意味で相応しい情動を抱くようにしなければならない。そのような適切な情動を抱くようになること以外に，感情労働の根本的な害から脱出する道はない。もちろん，そのような適切な情動を抱くときには，感情労働はもはや感情労働ではなく，人間の本来の尊厳を尊重する望ましい活動となるだろう。感情労働の根本的な害から脱出することは，感情労働そのものから脱出することなのである。

（信原幸弘『情動の哲学入門　価値・道徳・生きる意味』より。一部改変。）

（注一）　本文では「感情労働」という慣用表現において「感情」の語が用いられているが，それ以外は「情動」の語が用いられている。問いに答えるうえでは，この二つの語の区別は考慮しないでよい。
（注二）　ブルーワー：アメリカの倫理学者・政治哲学者。

（東京都立大学　前期　文系　人文社会学部　2021
一部の問いのみ抜粋）

生徒メモ欄

教員記入欄

チャプター2

問題およびヒント

問題を見てみよう

私たちは自分自身の情動に向き合う際に，また他人の情動に向き合う際に，どのような問題に留意するべきか。またそれはなぜか。筆者の見解を踏まえたうえで，あなたの考えを800字以内で述べなさい。

解答案をつくってみよう

500

600

700

800

（　　　　字）

生徒メモ欄

教員記入欄

自己評価表

答案が完成したら、以下の表を用いて自己評価をしてみましょう。
5段階評価の基準は、巻末のルーブリックを参照してください。

設問の理解	出題の意図および背景の理解	S A B C F
意見(主張)	設問と意見との関係	S A B C F
	独自性・独創性・発展性	S A B C F
理由(根拠)	事実に基づいた論証	S A B C F
	重要性・問題性	S A B C F
論理性・簡潔性	適切な論理展開	S A B C F
	簡潔な記述	S A B C F
表記・表現	誤字・脱字	S A B C F
	段落の設定	S A B C F
	制限字数	S A B C F
	文体の統一	S A B C F
	表現技法	S A B C F

生徒メモ欄

教員記入欄

チャプター3

答案例①

私たちは自分自身や他人の情動に向き合う際に、その情動が自分の立場や役職に要求された感情労働の産物の可能性がある、という問題に留意するべきである。そして自分が本来抱くべき情動は、自身の置かれた価値的状況にふさわしく、心の底から正直に湧き上がるものであるかを判断する必要があると私は考える。

その理由の一つは、筆者の見解と同様に、感情労働の根本的な害が情動本来の働きを妨げているからである。役職や立場には「こうあるべきだ」と要求される態度や情動がある。特に主従関係が雇用関係と直結する場合はそれが顕著である。雇用主が大きな間違いを犯した場合でも、それに従うことが当然と判断し、その忠誠心を誇らしく思ってしまう。しかしこれは、一人の人間として抱いた情動の明確化とその理解を否定し、場に応じた適切な情動を表現することを放棄することにつながる。私は、自分自身の情動は感情労働によって生み出された偽りの情動であってはならないと考える。本当は間違っているかもしれないと薄々気付きながら、その役職や立場としての「こうあるべき情動」で振る舞うことは、人間本来の尊厳を失うことだと思う。

また、もう一つの理由として、どの職業や立場においてもある程度の感情の抑制は不可欠だが、勤務時間外も感情という個人の内面をコントロールすることが習慣化していることは健康的ではないと考えるからだ。喜怒哀

楽といった情動を正直に明確化し、その情動に基づいて自分自身の行動や態度を決めることで、自分らしく生きることができると思う。相手の情動に向き合う際も、相手が感情労働による情動に支配されていないかと気配りをすることも必要だと思う。私たちは、感情労働は自分本来の情動とは異なるものであるとしっかりと理解しておくべきだ。自分の情動を明確化できるように、よく考えた発言と行動をするべきだと思う。

（791字）

生徒メモ欄

教員記入欄

評価してみよう

答案例①を、以下の表を用いて評価してみましょう。
5段階評価の基準は、巻末のルーブリックを参照してください。

設問の理解	出題の意図および背景の理解	S	A	B	C	F
意見(主張)	設問と意見との関係	S	A	B	C	F
	独自性・独創性・発展性	S	A	B	C	F
理由(根拠)	事実に基づいた論証	S	A	B	C	F
	重要性・問題性	S	A	B	C	F
論理性・簡潔性	適切な論理展開	S	A	B	C	F
	簡潔な記述	S	A	B	C	F
表記・表現	誤字・脱字	S	A	B	C	F
	段落の設定	S	A	B	C	F
	制限字数	S	A	B	C	F
	文体の統一	S	A	B	C	F
	表現技法	S	A	B	C	F

生徒メモ欄

教員記入欄

チャプター4

答案例②

　私たちは自分自身あるいは、他人の情動に向き合う際、自らの置かれた立場や状況を理解したうえでの向き合い方ができているか留意することが大切である。なぜなら、私たちは無意識的に人として自然に湧き上がってくる感情ではなく、自らに求められている感情の方を優先してしまうことがあるからだ。また、最終的な判断を下す前には周囲の意見に耳を傾けることが必要だと考える。

　本文中では優秀な執事が執事としてあるべき姿を優先させた結果、自分に対して好意を抱いている同僚の気持ちを理解できないばかりか、自分自身が彼女に抱いている感情にも蓋をしてしまっていた。また、ユダヤ人の召使いを解雇した例では、「主に従う忠実な執事」という彼が周囲から求められていると思っている理想の執事像を優先した結果、自らの感情を捨てただけでなく、同僚が抱いていた自分と同じ考えをも否定することとなった。どちらの例も執事が自らの感情を優先させたからといって結果は変わらなかったかもしれない。しかし、自分が抱いている感情に最初から蓋をしてしまうのと、自らの感情に向き合ったうえで執事としての職務を優先させるのとでは大きな違いが出てくる。

　私は人が自分の感情ではなく、自らが置かれている立場を踏まえた決断を下すことを悪いことだとは思わない。一方で、組織や職務を優先した行動をとる場合でも自らの奥底から湧き上がる感情に目を向けた上で最終的な

決断を下すことが必要である。そのためには、自分が感じていることを自分一人で抱え込まず信頼のおける者に相談することが大切だと思う。客観的な立場の者からの意見をもらうことで自分自身の感情に向き合いつつ冷静な判断を下しやすくなる。また、自分の考えを誰かに伝えることで、自分自身の思考も整理される。個人としての感情に蓋をするのではなく、その感情と自分に求められる感情の両方に目を向けることが大切である。

（796字）

生徒メモ欄

教員記入欄

評価してみよう

答案例②を、以下の表を用いて評価してみましょう。
5段階評価の基準は、巻末のルーブリックを参照してください。

設問の理解	出題の意図および背景の理解	S	A	B	C	F
意見（主張）	設問と意見との関係	S	A	B	C	F
	独自性・独創性・発展性	S	A	B	C	F
理由（根拠）	事実に基づいた論証	S	A	B	C	F
	重要性・問題性	S	A	B	C	F
論理性・簡潔性	適切な論理展開	S	A	B	C	F
	簡潔な記述	S	A	B	C	F
表記・表現	誤字・脱字	S	A	B	C	F
	段落の設定	S	A	B	C	F
	制限字数	S	A	B	C	F
	文体の統一	S	A	B	C	F
	表現技法	S	A	B	C	F

生徒メモ欄

教員記入欄

チャプター5

レベルアップのための読書案内

本講で学んだことを元に、さらにブラッシュアップするための
おすすめの書籍情報を知り、その書籍の読み方を学びましょう。

講義メモ欄

生徒メモ欄

教員記入欄